

こども環境学会 2025 大会（高知）

パネルディスカッション

パネリスト 三浦夏樹（高知県立坂本龍馬記念館 学芸課長）

「わがなすことは われのみぞしる

龍馬を育てたこども環境を写真と手紙から読み解く」

① 江戸時代の一般的な武士の教育と土佐藩の教育について

- ・まず、読み書きは家庭で学ぶ。
- ・家庭での教育が終わると寺子屋で朱子学（儒学）を学び、上士はのちに藩校で学ぶ。
- ・土佐の儒学者として有名なのは、江戸時代中期の谷秦山・垣守・真潮の3代。
- ・幕末の谷干城は、秦山の子孫。
- ・儒学者である谷秦山は、中国の学問（儒学）は大切だが、自国の歴史を学ぶことは、もっと大切なことだと周囲に説いていた。
- ・土佐藩では、儒学と共に皇朝学（国学）も盛んになる。
- ・秦山は、皇朝の人（日本人）は神道、歌学、有職を学ばなければならないと説く。
- ・垣守は、万葉学の大切さを周囲に説き、その後、幕末の鹿持雅澄の『万葉集古義』に集約される。鹿持は武市半平太の伯父で、幕末土佐の志士の尊王思想に大きな影響を及ぼす。

② 坂本家の成り立ちと教育

- ・坂本家の家系は、武内宿禰の子・紀角宿禰（きのつののすくね）に繋がる。
- ・壬申の乱（672年）の時、天武天皇に味方した坂本財（紀角の玄孫）などの子孫。
- ・坂本家は農民から商人となり、郷士（下級武士）になる家。
- ・6代目・直益は長男を分家させて、郷士株を取得させる。おそらく、その過程で名字を坂本と名乗るようになり、家系図と先祖の話を作り上げたのだろう。郷士株を取得するまでの名字は大濱だが、坂本を名乗り始めた時に、初代から3代目の墓も坂本と改めた。
- ・直益は、商家才谷屋3代目で、才谷屋を城下屈指の豪商まで成長させた。国学好きで、伊勢参りや金毘羅詣でに何度も行く。
- ・龍馬の曾祖父は、井上好春という歌人で、祖母・久も女流歌人。
- ・龍馬の手紙を見ると、徒然草や新葉集、古今和歌集、戦記物など多数の引用がある。
- ・雨乞い小町

「ことはりや 日のもとになれば てりもせめ さりとてはまた 天が下とは」
(この国は、日ノ本というくらいなので、日照りが続くことは尤もです。ですが、この国のことを天下とも言いますので、天（あめ）がふってくれても良いのに）
・「世界に行きなさい」という特殊な助言をくれる義理の兄・河原塚茂太郎。

③ 土佐人気質

- ・男は「いごっそう」、女は「はちきん」（頑固者で、あまのじゃく、気が強い）
- ・幕末維新期の土佐人は、原理原則に忠実に動く人が多い。＝自分の生まれ育った環境や受けてきた教育により、「自分の目指す道はこれだ」と決めてしまうと、まっすぐ突き進んでしまう。その結果、悲劇的な最期を迎える人が多い。しかし、強烈な個性を持っているため、個人としては魅力的な人が多い。龍馬や武市、吉村虎太郎など。協調性がない。組織の中には納まりたくない。議論が好き→自由民権運動に発展。上士の中にも、本人が納得しない限り、藩主・山内容堂にすら従わない人がある。容堂自身もそういうタイプで、側近には猛犬のような気質を持った人が多い。
- ・元々の気質が協調性の無い気質で、その上、寺子屋が乱立し、先生によって教え方が違うと、将来的にそういう人々をまとめ上げるのは難しい、と考える人が現れる。
- ・それが幕末の土佐藩参政・吉田東洋。東洋は、土佐人の協調性の無さを和らげ、組織（藩）がひと塊で動けるようにするには、同じ教育を受けさせるのが良いと考え、上士と下士と一緒に学べる新しい藩校を作ろうとした。それまでの藩校「教授館」を改め、文武の両方を教える「文武館」を、文久2（1862）年4月5日に開校させた。しかし、東洋は3日後に暗殺されてしまい、文武館では東洋の理想がすぐに実現しなかった。

④ 吉村虎太郎が親から受けた教育

- ・母の和歌
「四方に名を あげつつ帰れ 帰らずば 遅れざりしと 母にしらせよ」
庄屋の家に生まれた虎太郎は、子どもの頃から庄屋とは天皇直属の家臣だと教えられ、天皇に何かあれば真っ先に馳せ参じて働きなさいと教育されていた。そのため、土佐脱藩第1号となり、維新の魁となって散っていった。
庄屋という身分の歴史的背景と親の教育によって強固な意志を持った志士が生まれ育った例。

⑤ 龍馬と家族

- ・大変仲の良い家族で、愛情深い。19歳の江戸剣術修業へ行く時に、父・八平から訓戒の書を貰ったが、33歳で亡くなるまでお守りがわりに持っていた。
- ・家族みんなが詠んだ和歌の短冊も持っていたかった。
- ・最後に持っていた刀・吉行は兄・権平に頼んで送ってもらった家宝の刀。
龍馬にとって家族は常に心の支え。

【子どもの楽園 オールコック】

「江戸の街頭や店内で、はだかのキューピッドが、これまたはだかに近い頑丈そうな父親の腕に抱かれているのを見かけるが、これはごくありふれた光景である。父親はこの小さな荷物を抱いて、見るからになれた手つきであやしながら、あちこち歩きまわる。」

「いたる所で、半身または全身はだかの子どもの群れが、つまらぬことでわいわい騒いでいるのに出くわす。それに、ほとんどの女は、少なくとも一人の子どもを胸に、そして往々にしてもう一人の子どもを背中につれている。この人種が多産系であることは確実であって、まさしくここは子どもの楽園だ。」

「イギリスでは近代教育のために子どもから奪われつつある一つの美点を、日本の子どもたちは持っている。」

「すなわち日本の子どもたちは自然の子であり、彼らの年齢にふさわしい娯楽を十分に楽しみ、大人ぶることがない。」

ラザフォード・オールコック著

『大君の都 日本における3年間の滞在記録』 初版本 1863年（文久3年）刊行
初代駐日イギリス総領事。ロンドン郊外のイーリングの医者の子に生まれ、イベリア半島に従軍の後、外交官となり、中国福州・上海・広東で領事を務めた後、1859年にイギリス総領事として来日。1862年まで幕末の日本で日英修好通商条約批准など外交官として活躍した。本書はオールコックが一時帰国中の1863年に、3年間の滞日記録としてまとめたもの。日本の自然・地理・言語・宗教・政治・経済・法律・社会・生活習慣・美術工芸など多岐にわたり論述している。また、外国人初の富士登山も詳述している。

【イザベラ・バード】

「私は日本の子どもたちがとても好きだ。私はこれまで赤ん坊が泣くのを聞いたことがない。子どもが厄介をかけたり、言うことを聞かなかったりするのを見たことがない。英国の母親がおどしたりすかししたりして、子どもをいやいや服従させる技術やおどしかたは知られていないようだ。」

「家庭教育の一部は、いろいろなゲームの規則をならうことである。規則は絶対であり、疑問が生じた場合は、言い争ってゲームを中断するのではなく、年長の子どもの裁定で解決する。彼らは自分たちだけで遊び、たえず大人を煩わせるようなことはしない。」

イザベラ・バード著『日本奥地紀行』 初版本 1880年（明治13年）刊行

イザベラ・バードは、イギリスの女性旅行家。1878年（明治11年）に日本を訪れ、日

光・東北・北海道・伊勢などを旅し、各地の見聞をまとめた。女性の見た当時の日本社会ということで、大変意義のある書物である。

【エドワード・モース】

「いろいろな事柄の中で外国人の筆者達が一人残らず一致する事がある。それは日本が子どもたちの天国だということである。この国の子ども達は親切に取扱われるばかりでなく、他のいずれの国の子ども達よりも多くの自由を持ち、その自由を濫用することはより少なく、気持のよい経験の、より多くの変化を持っている。」

「赤ん坊が泣き叫ぶのを聞くことはめったになく、私は今までのところ、母親が赤ん坊に対して癪癪を起こしているのを一度も見えていない。」

「私は日本が子どもの天国であることをくりかえさざるを得ない。世界中で日本ほど、子どもが親切に取り扱われ、そして子どものために深い注意が払われる国はない。ニコニコしている所から判断すると、子ども達は朝から晩まで幸福であるらしい。」

「世界中で、両親を敬愛し老年者を尊敬すること日本の子どもに如くものはない」

エドワード・モース著『日本その日その日』 初版本1917年（大正6年）刊行

アメリカ出身の動物学者で、明治初期に研究のため来日。請われて東京帝国大学で教授となる。大森貝塚を発見し発掘調査を行う。明治の半ばまで、長年日本に滞在し、自他ともに認める日本最良。晩年になって日本での日々をまとめた『Japan day by day』を出版。